

アウシュヴィッツ解放より75年 「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」というが

本日の日本経済新聞と神戸新聞の両紙に、アウシュヴィッツ強制収容所からユダヤ人が解放されてから75年との記事があった。偶然の一致であるが、このコラムを書いた記者の年齢を推量すると、この出来事は心の奥底に暗くしまわれていた記憶である可能性がある。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」 これはドイツ帝国の宰相 オットー・フォン・ビスマルクの言ったとされる言葉である。

Fools say they learn from experience; I prefer to learn from the experience of others. …Otto von Bismarck

アウシュヴィッツ以前には、これに相当する愚かな行いは存在せず、従って学ぶべき歴史もなかった。そして、ビスマルクより後に来たナチス・ドイツが不幸にも学ぶべき歴史を作ってしまった。後世の「賢人」はこのナチスの歴史を自らの戒めとして心にとどめるべきである。人とは多かれ少なかれ自身の中に何らかの残虐性を有し、集団ともなれば条件次第でその残虐性は大きく増幅される。

日本経済新聞 2020.1.29

2020. 1. 29

春秋

「夜と霧」を初めて手にしたときの衝撃を覚えている。ナチスの強制収容所での体験を、精神医学者のV・E・フランクがつつった本だ。貨車に詰め込まれて収容所に到着する冒頭から魂を揺さぶるが、旧版にあった巻末の写真をまた、この極限の悪を告発していた。

▼犠牲者が残した、おびただしい数の眼鏡や靴や義足。女性たちの大量の髪。そして、うずたかく山をなしている人間の灰……。第2次大戦の末期、点在する収容所に入った連合国軍はこの光景をじかに目にした。100万人以上が殺害されたアウシュヴィッツ強制収容所は1945年1月27日に解放され、今年で75年がたつ。

▼ポーランド南部の収容所跡では一昨日、追悼式典が開かれ、生存者約200人が列席した。しかし米英などの首脳級は参加せず、ロシアのプーチン大統領は招かれなかったそうだ。背景には大戦やホロコーストをめぐる各国の認識の違いがあるという。人類の犯罪をこれまで以上に教訓とすべき時代に、残念なことである。

▼フランクは収容所を、45年4月に出ることができた。しかし仲間たちは深いトラウマに苦しんでいたと「夜と霧」にある。自由の身になったのに「あらゆるものは非現実的であり、不確実であり、単なる夢のように思われる」(霜山徳爾訳) 症状だ。75年を経て、そういう人々の古い心の傷がうずいているかもしれない。

恥ずかしながら、一読では歌の意味をはかりかねた。〈選別はたつたの三つ 労働者、実験検体そして価値なし〉(永田和宏)。短歌誌の解説に「アウシュビッツ」の名を見つけて、何を詠んでいるのかによく思い当たった◆連行のユダヤ人を待っていたのは強制労働か、人体実験か、ガス室送りか。ナチス・ドイツによるホロコースト(ユダヤ人大虐殺)は、人類史上最悪の犯罪ともいわれる◆110万人以上を死に追いやったポーランドのアウシュビッツ強制収容所が解放されたのは、ドイツ降伏のおよそ100日前である。75年にあたる今月27日に追悼式が行われ、生存者たちが記憶の継承を訴えた◆大戦中の神戸を舞台にした手塚治虫さんの漫画「アドルフに告ぐ」に、こんな語りがある。「どの人種が劣等だとか、どの民族が高級だとか…あおりたてるのはほんのわずかなひとにぎりのオエライさんさ…」◆漫画では、ドイツ人とユダヤ人の少年に戦争が牙をむき、その友情を引き裂きにかかる。声の大きな者が他者への憎しみをあおり、分断と対立の種をまく…そんなことは昔話だと、いま言い切れないのが悲しい◆アウシュビッツを訪ねる若者が増えているそうだ。歴史から目をそむけまいとする人類の良心を信じたい。 2020.1.29

「愚者は経験に学び」というが、人類が経験したこのアウシュヴィッツの経験を人類は忘れてはならない。この経験を真正面に受け止め、それを後世に伝えていく。そこからアウシュヴィッツの意味と人間があるべき姿を読み取れる者は決して愚者ではない。アウシュヴィッツ以前は、Fools say they learn from experience ユダヤ人を社会から締め出すことが社会的正義であるとし、その活動によって社会の秩序が保たれていると信じた、その経験にこそ誤りがあった。

アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所 (Wikipedia)

アウシュヴィッツの死亡者数について

慰霊の碑文(オランダ語)。この地で150万人が死んだことを後世に伝える(第二強制収容所) 現在のアウシュヴィッツ収容所博物館および公式ページでは、1999年の研究により1944年までに強制収容されたユダヤ人は110万人であり、そのうち20万人は労働に供されたと書かれている。

ニュルンベルク裁判では、「アウシュヴィッツで400万人が死亡した」と認定し、オシフイエンチム博物館の碑文にもそのまま「400万人」と記載されていたが、冷戦後の1995年「150万人」に改められている。

終戦直後の1945年当時にソ連が主張した400万人という数は、当時の非ナチ化の影響を強く受けていると認識されている。同様に近年においても、新たに主張される死亡者数の多い少ないにかかわらず政治または宗教的背景に影響されていることが多い。たとえば、イスラム教徒の反ユダヤ主義者との接触が疑われる「歴史見直し研究所」は15万人という数値を掲げている。このような問題の根本には「絶対的な数値が今後得られる可能性が低く、主張することによって自己または属する集団の利益に有利に働く」という事情が挙げられる。